

佳作

変わらない笑顔で

東京都 町田市立町田第二小学校五年 平林 羽菜

私の祖父と祖母、曾祖母が三人で住む町は、海と緑がゆたかな田舎町だ。私の住む街とは時代が違うみたい。長期休みになると遊びに行く。もちろん、今年の夏休みも。

車で二時間近くかかるため、車内では、妹とおしゃべりをし、昼寝をする。目が覚めて、辺りを見回すと、セミの大合唱と海の香りが私をむかえてくれる。これぞ夏休み。思わずニヤニヤと笑ってしまう。毎年恒例の一週間が始まる。家に入ると、祖母がうれしそうに出てきてくれる。二階へ行くと、扇風機の音と、テレビの大きなナレーションの声、パタパタとうちわで涼む曾祖母が、びっくりした顔をしながらも、うれしそうに迎えてくれる。

広い庭には、名も知らない草花達が、風にゆれながらおしゃべりをしているようによりそっている。

始めた。私は、本当にびっくりした。都内なら業者を呼んで、長そで長ズボンでとるものを、上半身裸で立ち向うなんてありえない。すごすぎる。

二階に住む曾祖母は、しわしわしていて柔らかいので、妹とベタベタさわる。気持ち良くてなぜか落ちつく。どうしてもさわりたくなる。

楽しい一週間があっという間に過ぎてゆき、家に帰る時、曾祖母が、いつも言う。

「また来てね。けどもうこっちがいないかもしれないね。アハハ。」

笑ってごまかすが悲しくなる。もっと長生きしてほしい。九十六才まで生きているんだから。ずっとずっと元気でいてほしい。

この一週間で心も体も満たされる。祖母達も同じ気持ちでいてくれたら嬉しい。変わらない景色と笑顔に会えるのが今から楽しみだ。

まるで森の中みたい。私よりも大きいひまわりが、じっとこっちを見ている気がした。私の住む街は、新しいマンションがどんどんそびえ建ち、家から見える景色は、日に日に変わっていく。小さい頃、当たり前だったあの景色が、恋しくなる時もある。でも、祖母の家の庭の端から見ると、海と竹林は、いつ来ても変わらない。いつまでも見ていたい、私の大好きな景色。変わらないでほしい。

そんな庭には、ブルーベリーの木がある。おばあちゃんが、私達がたく山とれるようにと熟した実を残しておいてくれた。春には、花も咲いていなかったのに、こい青紫色のぶっくりとしているおいしそうなブルーベリーがたく山突っていた。ブルーベリーがりを始めた。私は、蚊にさされたため、家に入った。悲鳴が聞こえたかと思うとお母さんと妹がすごい顔で走ってきた。なんと、スズメバチの巣がブルーベリーの木にあったそう。すると、いつもの定位置でテレビを見ていた祖父が立ち上がり、殺虫剤とトングを持ち、上半身裸で庭に出ると、シューッと殺虫剤を銃の様にかけ、トングでハチの巣を落とすと、足でグシャッとふみつぶした。家に入ると、また寝転がって何事もなかったかの様にテレビを観